

不登校の子に寄り添う

箱庭療法に取り組む医師 紫英人さん 福井

福井県鯖江市にある小児科・内科「ともだち診療所」。院長の紫英人さん(38)は、風邪や痛みなど一般診療のほか、不登校の子どものために「箱庭療法」を手がけている。同時に診療所そばの真宗大谷派円立寺の住職。「ともだち」の名前は「俱会(くわい)一処(いちこ)の俱(くわい)が「とも」と読めることから名付けた。「ありのままの自分を大切にしていっしょに生きていく」との願いを込めた診療所を訪れた。(申信考)

JR北陸線鯖江駅から 砂遊びを通して子どもたちのたくしーで十五分。カウ 心を開放し、自分で自分ンセリング室にはいろいろを癒やす力を掘り起こしるなおもちゃが置かれ、ていくのが目的と話す。ほっとする雰囲気があった。紫さんは「箱庭療法は、調子を崩し、学校に行けなくなった小中高生たち

砂遊び通し心を開放 癒やす力はぐくむ



「子どもと向き合ったらどの遊びでも真剣にやります」と話す紫さん

が、主に学校の先生の紹介で訪れる。



雑然と模型配置

原因不明の腹痛を訴えた十二歳の中学生。最初の箱庭作りの時、兵士や戦車の模型を砂箱に雑然

と置いた。本人は「戦っている、というところを知ったをしていんだ」と言う。その生徒が付けた作品名は「紛争」。二回目では人形の配置が二つのグループに整理される。タイトルは「狭み撃ち」。三回目になると、自分たちの墓を守る日本軍が、アメリカ軍と戦うというストーリーが生まれる。少年はほつりと言った。「英語塾の先生がアメリカ人だけど、その先生の言っている英語が

のを見つけた時にそうなる」。紫さんは円立寺で生まれ、十二歳で得度。福井大医学部を卒業し心臓血管外科医になったが、激務が続き疲れ果てた。二〇〇〇年、医師をやめつもりで京都市にある大谷派の教学施設「大谷専修学院」に入学した。

さっぱり分らない」このころから学校に行くようになって。腹痛があると保健室で休むなど痛みと上手に付き合うようになった。「救出」がテーマ

四回目は「終戦」。その後、一時、不登校になったが、最後に作った作品は「救出」だった。「学校でこのたこや塾での葛藤などを自分から語りながら心の混乱に整理をつける。それでもやはりいやなことはあるけれど、自分で自分を救出す

クリック 俱会一処 多くの人が一つの場所集うという意味。阿弥陀(あみだ)経は阿弥陀の浄土に往生すれば上善人(宗教的善を身に付けた人)と会

うことができると説く。箱庭療法 砂箱と模型玩具を使って一つのまとまった世界を表現する心理技法。スイスのユング派心理療法家カルフによって開発され、日本では1965年、故河合隼雄

画家福島さんが来月広島で個展 本紙連載出版記念 「洗心」面 で「落と街角の神話」を連



美しい」という美学に基づいて瀬戸内海を巡った旅日記。個展は四十回の連載に大幅加筆し、同名の書名で、みずのわ出版(神戸市)から出版するのを記念して開く。挿